

「大事に食べたい！」

～命の尊さと「食」の大切さを感じる食育活動～

熊本県立ひのくに高等支援学校

1 はじめに

食に関する指導の目標の1つに「食物を大事にし、食物の生産等に関わる人々へ感謝する心を持つ」というものがあります。本校では、この目標を消費者の立場から考えるだけでなく、生産者の立場から考えるべく、生徒が校内で栽培、販売、納品した野菜を給食で活用したうえで、「食育活動」にも力を入れています。

生産の大変さや収穫の喜びを直に体験しているためか、「家では野菜を食べようとしない我が子が、学校で野菜を食べている様子を見て、驚いた。」という声を保護者の試食会でよく耳にします。徐々にではありますが、苦手を克服している生徒がいるようでした。しかし、偏食傾向が強く、食事を減らしてしまう生徒や一定の量で残食が毎月出ているということも事実でした。

そんな、生徒たちが「食」を通し、どのように感じ、学んだのか、成長していく姿を紹介します。



2 校内弁論大会

平成29年1月20日、校内弁論大会を行いました。交流及び共同学習の一環と



して、熊本県立菊池農業高等学校の生徒を招いて、交流弁論をしてもらうのが恒例となっている行事です。本校の弁論の内容は、命や家族についてなど様々な演題がありました。菊池農業高校の生徒の弁論「運命の豚～180日間の軌跡」は、通常であれば見捨てられる病気がちの子豚を、出荷できるまで懸命に世話をした日々が、自分を変えてくれたという内容でした。大会後、弁論を聞いた生徒は「病気になった豚は出荷できず、自分たちは食べられないこと、出荷までの大変さを初めて知りました。大事に食べたいです。」と語り、命の尊さや「食」の大切さを感じながら、下の写真のようなその日の給食を食しました。

《1月20日の献立》

麦ごはん、牛乳、ポークロールカツ
ポトフ、焼きマリネ、フルーツ杏仁豆腐



3 残食調査について

保健委員会が中心となり、同年1月16日から1週間残食調査を実施しました。普段知ることのない残食の量。1週間の記録をグラフにまとめて掲示し、全校集会で報告を行いました。前月の1週間では3850gあった残食は、調査期間中1875gと半分以下に減らすことができ、生徒たちの達成感に繋がる活動となりました。



残食を計っている様子



グラフに数値を表示し、お知らせしている様子



残食集計結果を全校集会で伝えている様子

その後、あるクラスのホームルームで、食育活動を行いました。

ペットボトルのキャップを使い、残食の重さを体験的に理解してもらうよう工夫しました。前月の1週間と調査期間中の重さを比べてみたり、量の多さを目で見て確かめたりしました。生徒からは「もったいない」「重い」といった声が飛び交いました。



重さを比較したり、確かめている様子

4 おわりに

この取組を行う前、全校生徒に戦後から現在に至るまでの「食」の話を行いました。日用品やその日食べるものすら手に入らなかったこと、互いに身を寄せ合い、必死で生き抜いてきたこと、生活に苦しむ人々を救おうと、様々な国から支援や援助を受け、学校では「給食」が開始されたこと。私たちが豊かな生活を送れるのは、多くの人たちからの支援と援助、そして、必死で時代を生き抜き、今なおお支えてくれる人たちがいるからこそ、命を繋ぐことができていることを伝えました。

校内弁論後、偏食傾向が強く、食事を減らしてしまう生徒に対し、生徒同士で指摘し合い、食べる量を見直すという姿が見られました。生徒にとって、今回の取組が「食」を考えるきっかけとなったようです。1つ1つは小さな取組ですが、これからも、命の尊さと「食」の大切さを感じる食育活動を行い、社会を支えられる人に成長してほしいと願っています。

